

前人未到の歩み

生産管理へのIT活用

【5】

◇実棚型生産管理への挑戦

生産管理の使命は出荷数量とバランスの取れた生産計画を組むことだ。しかし、過剰な安全在庫によって、だまされまじバランスを取っている例も多い。在庫削減が叫ばれる中、すぎる思いで実棚型生産管理と呼ばれる取組みに挑む企業が出てきた。文字通り毎日棚卸しを行う管理方式だ。食品メーカーでは実践できないと思われてきたが、流れが変わりつつある。

◇実棚型管理をシステム化

創業時から実棚型生産管理に取り組んできた某食品メーカーは約30年前、パソコン用の表計算

ソフトを利用してMRP (Material Requirement Planning) 原材料所要量計画) と呼ばれるシステムを自作した。一般的なMRPの場合、製品や原材料などの在庫を製造量や入出庫量を基に計算した理論値で把握する

在庫削減へ毎日棚卸し

関心示す食品メーカー出現

要量が計算される。実際に棚卸した在庫数量を基に計算しているので、不要な生産や原材料発注が防げる。無駄な安全在庫でだまされまじバランスを取る誘惑に駆られても、それを極小にとどめられるのだ。

食品製造業の場合、他工程への原料振り替えや製造時に発生した副産物の利用、また落下や製造不良による廃棄など、モノの流れが一方通行ではない。同システムでは、工場内でのモノと情報の流れを一致させるため、仕損処理をできるようにした。「転出」「転入」「廃棄」など、モノの動

やり取りの中で数字のチェックが行われるが、生産管理システムは工場内でブラックボックス化している場合が多い。確かな数字を基に管理できる方式として、同システムに関心を示す食品メーカーもある。

◇実棚めぐる思い込み すぎる思いで実棚型生産管理に取り組もうとするメーカーでさえ、最初は無理だ」と弱気になる。しかし、思い込みが過ぎない。実は、すべての在庫を数える必要はないのだ。前述のメーカーでも入出庫があったものや製造したものなど、実際に動きがあったものだけ数えている。現場にとっては、在庫を数えて数値を入力するだけなので負担も少ない。思わぬ効果もある。棚卸を楽に行いたいため、余分な原材料をラインに持ってきたり、必要以上の製造を行っ

生産計画をどう組むか

が、同メーカーのMRPでは、それらの在庫数量を毎日棚卸してシステムに入力。受注数や販売見込数を入力すると、包装計画、配合計画、発注計画が自動的に作成され、各工程に必要な原材料や半製品などの正味所

きにに応じて数量を入力。工程をまたぐ在庫の移動も共有しているので、移動元を「転出」とすると移動先では自動的に「転入」となる。在庫の流れが一目瞭然なのだ。販売管理システムや購買管理システムでは、社外との

たりすることを避けるようになるのだ。心理面からも、在庫を抑える仕組みが作用している。あるメーカーでは、ロス金額を約60%も削減するといふ実績を出した。(取材協力) 情報システム(株)